

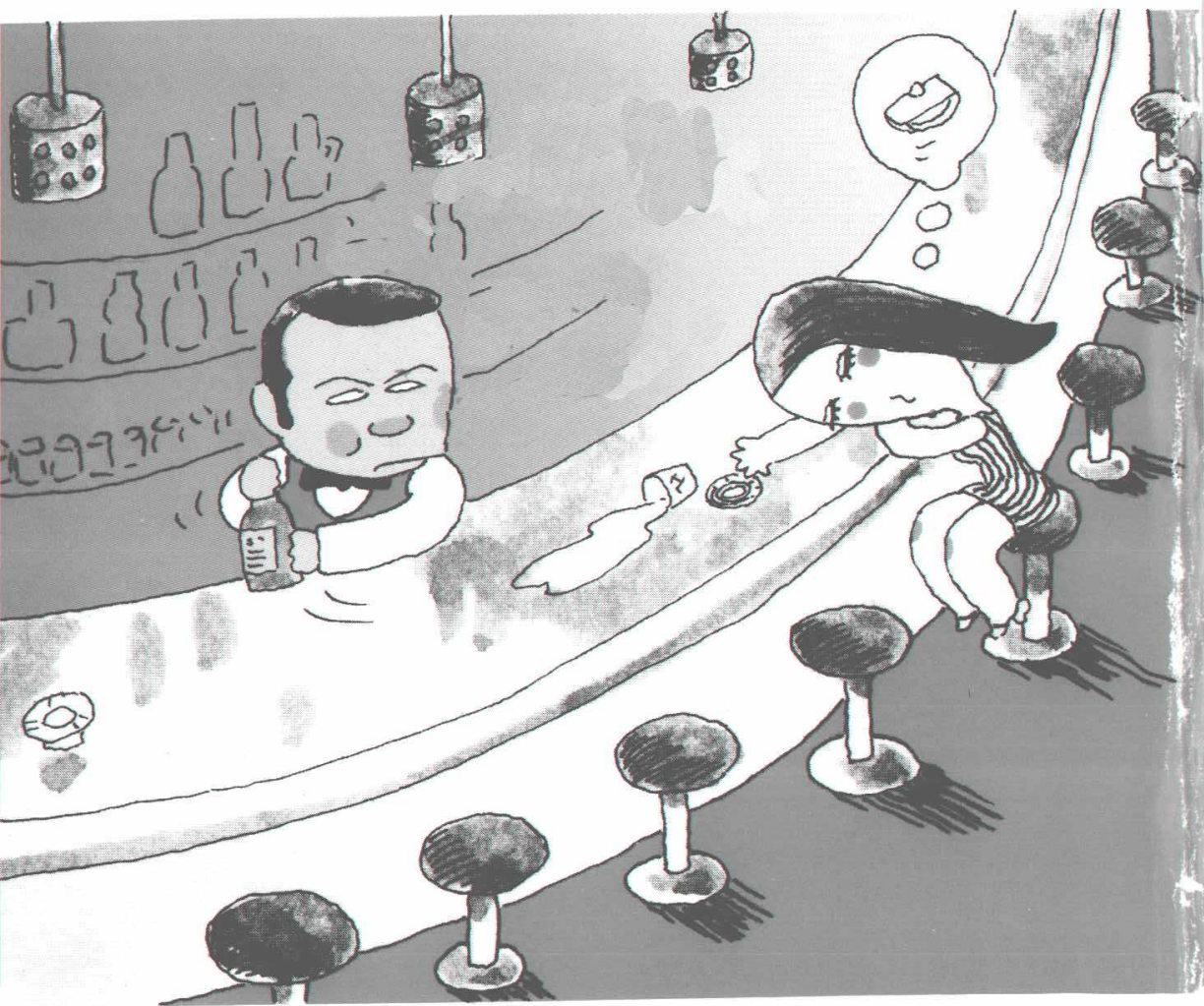
半村良 うわさ帖



毎日新聞社

うわさ帖

和良



定価 八八〇円

うわさ帖

昭和五十四年四月十五日 印刷
昭和五十四年四月二十五日 発行

著者 半村 良

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷・図書印刷 製本・大口製本

花よりワイン

ヨーロッパ還替旅行

小島直記

写真小島三樹

実業之日本社

札幌の嘘	61
春の帯	66
おとなの日	72
活断層物語	78
帰らざる日々	83
歴史と文学	88
裏とおもて	94
UFOと超能力	99
親方バンザイ	104
沖派と岸派	109
マンションの蚊	115
てのひらの傷	120

教えてくれる人 125

図々しい季節 131

縁起かつぎ 137

クーラーにご用心 142

夏の思い出 147

運のいい男 152

筋が通るはなし 159

冗談こわい 164

仕事ということ 170

映画とテレビ 175

おお社員旅行 181

ある新入社員 187

一万円時代	193
楽しい講演旅行	198
秋の夜長に	203
来年のジャイアンツ	209
誕生日について	215
家の構造	220
突然のおたずね	225
何をする人ぞ	231
さらばわたしのジャイアンツ	236
どうぞSFを	241
師走の枝豆	246
あと二週間	251

大みそかの客 257

七草のころ 262

うそ替え 267

サヨナラのしかた

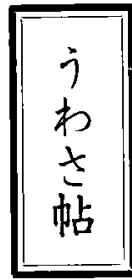
272

二月の雨の夜 278

装丁

滝田

ゆう



燃えないゴミ

随筆と童話には手を出すまい……。

十年ほど前、そうきめた。子供に読んでもらう物語を書くには、まず子供の喋り方ができなければいけないと思ったからである。元来子供っぽい人間で、喋り方だっけかなり子供じみている。でも、それは子供っぽい大人の喋り方であって、子供の喋り方ではない。こすっからくていやらしくて、本当の子供の喋り方なんてできやしない。ずっと昔に忘れてしまったし、今の子供は私らの子供時代とまるで違うはずである。

童話は綺麗な心で書くもので、そうでなければ子供をだますことになる。子供を食いものにするなら、やはり大人を食いものにさせてもらったほうがよほど気が楽だ。……で、童話は書くまいときめた。

随筆も似たような理由から、書くまいと思った。いや、随筆の場合には、売るまいと思ったのだ。随筆は味のある人がさらっと書いて、その人柄がにじみ出るところによさがあると思っっているからだ。要するに人柄が書くもので、私などどうてい人さまの前へ出してよろしい人柄なんかじゃない。もっと年をとったらどうか判らないけど、今はダメ。……そう思っている。

ところが数年前童話を一冊出してしまった。いろいろな事情で断りそこなってしまったのだ。書いたあとでなさけなかった。きめたことは何ひとつ守れないんだから、てめえって奴は……と、しきりに自分を責めたりした。

随筆に至っては、ああ、またこうやってはじめてしまっている。実を言うところまでの文章は、週刊文春の昭和五十一年一月一日号にのせた文章とまったく同じなのである。それはその年の十二月二十五日号まで毎週続けた「女帖」というシリーズの第一回目のものなのだ。それがこの「へうわさ帖」でもそっくりそのまま使える。事情は全然変わっていないのだ。

「女帖」は私の座右に実在する「人物帖」に由来している。私は自分が映画会社か何かのようなつもりでいて、その「人物帖」には専属俳優がつめこんである。喋り方から出身地や家庭の状況まで、かなりくわしく書いてあって、それはすべて実在の人物たちなのである。小説を書くとき、その専属俳優を適当に引っ張り出す。小料理屋のおかみが妖艶な謎の女になったり、カーキチのドラ息子がニヒルな殺し屋で登場したりするのだ。

で、「女帖」はそのノートの中から、女優だけをとり出したのだが、「男帖」はどうもやりにくい。それで今度は「へうわさ帖」にした。この瞬間も私のまわりで発生し続けているちょっとしたエピソードを、私のことだから適当に嘘っぱちもまじえながら書いて行こうというのである。

前置きをいくらやっても、「女帖」のときと同じことになってしまいうので、とりあえず見本をひとつお目にかけて、お気に召したなら是非ともごひいきくださいますようお願い申しあげます。

この正月のことですが、わが家へ十六歳の女の子が三日間泊まりに来た。いなかの子で、東京は二

度目だそうなのだが、いい子だったなあ。

美人じゃないです。何しろ私の遠い親類に当たるんだから、その点はもう絶対に間違いはない。のそつとして、やたらにはずかしがってばかりいて、「ハイ」と「イイエ」しか言わない子なんですが、とにかくその子に台所を手伝ってもらった。

でも、東京はこれが二度目だし、ゴミのすてかたなども判らない。何しろ正月休みのことだからゴミの収集も何日か先のことになるわけだし、その子によく教えてやった。

「東京はゴミの処理で大変なんだよ。燃えるゴミと燃えないゴミを一軒一軒がちゃんとわけておかないと、燃やすときにカマがこわれたりするからね」

彼女は判ったのか判らないのか、のそつとした感じで、「ハイ」とうなずいていた。で、次の朝、おふくろが台所で私を呼んでる。

「これ見てごらんよ」

ゴミの袋を指さしてる。燃えるのと燃えないのと、ふたつ並べてあるのだが、お茶がらなど流しの屑を入れる小さな生ゴミの袋が、燃えないほうへわけてあるのだ。

私は笑いながら彼女にたずねた。

「これ、どうして燃えないほうに入れたの」

彼女はやつと言葉らしい言葉を私に聞かせてくれた。

「だって、ビシヨビシヨだから」

おふくろがケタケタ笑っていた。

「これは乾けば燃えるんだよ。ビシヨビシヨに濡れてても、燃えるゴミは燃えるゴミさ」

彼女は憮然とした表情でうなずいた。

で、また次の朝。おふくろが台所で私を呼んでいる。

「これ見てごらんよ」

ゴミの袋を指さしてる。

「うへ」

私はその朝も笑った。燃えないゴミの袋の一番上に、卵の殻がちょこんと置いてあるのだ。

「なるほどね。いれものは燃えないゴミだよね」

でも、今どき真面目でいい子でしょう。彼女はゴミをすてるたび、真剣に考えていたのだろう。これは燃えるか燃えないか……そう言えば卵の殻なんかは、燃えないゴミみたいな気がしないでもない。かわいいなあ。でも何だか変だなあ。

いえ、その子が変わだって言うんじゃないんです。台所のゴミまでいちいち燃えるか燃えないか考えずてなきゃならないこの世の中がですよ。

そんなこともちらっと考えるけど、私としては深刻がる柄じゃないし、すぐ冗談にしちゃった。

「たばこのフィルターは燃えないゴミじゃないのかな」

まわりにおっちょこちょいがたくさんいます。私のそのひとことで火がついちゃった。

「燃えないゴミのほうへ燃えるゴミを入れちゃいけないのかな。燃えない奴の処理のしかたなら、燃えるほうも始末できちゃうわけだろう」

二十五歳のせがれのためには、一度はこういう体験もいいな、とおもう。エチケットだの、ゼントルマンシップなどといっていても、いざというときにハカなく、頼りないものかということを目撃し、実感しておくといい。そして、混乱の中で老いたる両親をかばいながら大汗をかくということは、生涯忘れられぬ何かを心に刻みつけることになるだろう。

そうおもう一方、還暦を迎えた老妻を、あの中でもみくちやにするのは可哀想だとおもった。第一私自身、あのときの元気はない。五十六歳と六十三歳の肉体的条件、落差というものはじつに大きい。

しかし、この事故の不安は、単なる杞憂におわった。空港には秩序があった。私たち親子は、ウィーン方面行のゲート近くまでかなりの道を歩き、バーの椅子で出発時間を待つことにした。

ロンドン着が七時、ロンドン発が十時。私はためらうことなくワインをのみはじめたが、これには理由があったのである。

見て見ぬふり

俗に文壇バーと呼ばれる店がある。作家や出版関係の人々のたまり場みたいな酒場です。のべつではないけれど、生意気に私もそういう店でよく飲む。

実を言いますと、場所は新宿だが私も以前そういう店で働いていたから、客になっても勝手はよく判っている。店員がいつの間にかお客づらをして飲んでいるんだから、事情を知っている人が見たらあまり見よい図ではなからう。

私もその辺のことがいつまでたっても心のどこかに引っかかっている、その店が満席になりそうになると、なんとなく逃げ出してしまふ。もとバーテンが席を占領しては申しわけない気がするのだ。

でも、そういう時って、ときどき淋しいことがある。いつも必ずというわけではないが、満席の店から逃げ出して外へ出たとき、何かのはずみで淋しいと思ったりすると、作家や出版関係の人がまったく姿を見せないような店へ足が向く。あらためて客になりにいくわけです。

でも、やはりそういう店へ行っても客になり切れないところがある。

たとえば私に一人、連れの男性がいたとして、話が仕事のことになったりすると、その席に二人つ